

Takashi AKIYAMA Poster Museum Nagaoka

2009-7-12

APM news 004

秋山孝ポスター美術館 長岡

歴史的建造物・金庫扉と雁木のある美術館（旧北越銀行宮内支店）



秋山孝のメモランダム・抜粋 - 2

「サフラン酒の蔵に展示したぼくの習作たち」

1975(昭和50)年から1979(昭和54)年の多摩美術大学の学生時代から東京藝術大学大学院生初期、キャンパスに描いた習作を中心に約30点展示した。展示日は、「秋山孝ポスター美術館・開館記念式典」の7月11日(土)と開館初日の12日(日)の2日間だけの展示だ。ぼくは、小学生の登校時にサフラン酒の蔵を毎日眺めた。当たり前すぎて感動はなかったがその美しさは、身体に染み込んでぼくの建築の基準となった。後、どの日本の街で見た蔵よりも装飾的で威圧感がない軽快な印象を持った。その蔵でぼくの習作を展示することを思いつき実現した。ライティングがあるわけでもなく、ほのかな光の中で見る作品の佇まいに価値があると思っている。作品と建築の関係は、見る見られるという微妙な響きあいが必要だ。空間と場の持っている時間の経過がそこにある。1924(大正13)年建設されたサフラン酒蔵と1925(大正14)年の美術館とは、わずか1年違いの建造物だ。美術館には色彩鮮やかなポスター作品、蔵には彩度の低い青春時代の習作、その対比も面白いと思い展示しようと考えた。

青春時代の作品を今見ると、気恥ずかしさでいっぱいになる。あまりにも気負い過ぎ、表現力に頼っている自分が見えてくるからだ。また、画材に対して実験的な試みをしているところもたくさん見えてきてしまうのだ。その頃、いつも名作を見ながら光と影、質感、それにリアリズムとは何かを研究した。

「そこにただあるだけで美しいという気持ちが沸き起こるのは何故だろうか」という疑問があった。ひたすら表現技術について安井曾太郎のデッサンやワイエス、シャルダンから受ける静けさや哲学性について想いを馳せた。さらに、シュールレアリスムやキリコの形而上学的な表現をものにしたかった。ぼくの風景画作品を見ると、その当時の表現研究をしている痕跡が残っている。

グラフィックデザインとイラストレーションの関係は、絵画表現を使い言葉に出来ないメッセージと美を視覚伝達することだ。だからその表現技術を獲得し自分のものにしなければならなかった。卒業制作の「軽業師シリーズ」7点は、ロープと軽業師の不安定なバランスを風刺的表現で孤独な空間を描こうとした。タイトルは「自業自得」で自己批判し、自分を笑い飛ばす象徴的な老人のキャラクターを作り上げた。わずかなエレメントと色彩だからこそ考え切ることができたような気がする。しかも、あくまで学生の域を出ない思い込みの強さがあるのでやはり気恥ずかしいものがあった。グラフィックデザインとイラストレーションのもっている乗り越えられない軽快感のある表現に憧れがあったのだが、どうすることもできなかった。その後、それを克服するために大学院があったのかもしれない。